

によりて知り得たるが如ければ、兵の報告の愈々怪しと思はるゝなり。かくて塔の見物はしたれど、その頂上を究めて貴重なる題署を検し得ざりしは、大風の祟りとはいへ、史料採訪旅行に於ける大失敗なり。無精はすべからざることなり。

(東洋史研究第四卷第四・五號、昭和十四年六月)

書き抜きを搜しながら

ずっと以前に作つておいた一寸した書き抜きが、どこを捜しても見つかぬあげく、この中にでも紛れ込んであるてくれないかと、一縷の望をかけて引っぱり出したのが埃だらけの文筐である。一番上に、幾つかに折りかへした薄黒い紙片が裏を見せてゐるのが、半分程を區切つて氣味の悪い色に汚されてゐる。あツ、また鼠の尾籠な所業である。手で触るのも薄氣味悪いので、ピンセットでつまんでカン／＼照りつけるベランダの日光に曝して置いてぢつと眺め入る。開けて見るまでもなく、思出の深い紙片である。

大正九年渡歐の途次、二月十六日の夕方に新嘉坡を出た船が翌朝マラッカに寄港すると、半日こゝに停船するとふれ出されたので、同船の二三子と一緒に上陸して見物することにした。停船するかせぬかは積荷の有無によつて定まることで、多分上陸の時間はあるまいと事務長から聞いてゐたので、碌碌案内記も見ない不用意の見物であつ